

第13報 日高國浦河町向別川上流の石灰石

湊 正雄* 深田 淳夫* 垣見俊弘* 山田 一雄*

I 緒 言

昭和 26 年夏, 委嘱を受けて, 日高國浦河町向別川上流の本沢に分布する 2 つの石灰石岩体について調査を行つた. この地に露出する石灰石は, いずれも日高系の輝緑凝灰岩中に胚胎するレンズ状の岩体で, 本調査の結果, 極めて小規模なものであり, かつ交通も不便なため, 稼行の対象とはなり得ないものであらうと推論される.

II 地質概説

この附近の地質構成員は上から次のごとくである. (第一図参照)

第四紀	沖積層
	~~~~~不整合~~~~~
新第三紀	川端統
	——斷層——
白堊紀	貫気別層
	——?——
先白堊紀	日高系

これらの地層はいずれも北西～東南の走向をもつて発達している. 川端統は本地域の東南部に分布するが, 筆者等の調査せる範囲一本沢流域一では露出が悪く, 直接には認め得ない. しかしながら, 竹内嘉助, 三本杉巳代治両氏の調査によれば, 新冠層群(川端統)の下部, すなわち礫岩を主とする比宇層およびその上部に砂岩, 頁岩の互層を主とする幌別層が発達していることが示されている. 白堊紀層と如何なる関係にあるかは観察し得る箇所がないため不明であるが, 分布状態からおそらく断層で接するものと推定される. 白堊紀層は向別川下流より上流にかけて順次下部の地層が見られ, 日高系と接する地域では, 主として堅硬なる灰色砂岩と黒色頁岩の互層よりなる貫気別層が発達する. 化石は未詳であるが, 本層の上部に *Desmocevas japonicum* YABE, *Acanthocevas* cf. *asiaticum* JIMBO などを含むトリゴニア砂岩層(ギリアーク統)に対比される地層があることから, おそらく下部菊石層に比べられるものである. 日高系は, 竹内, 三本杉両氏の調査によれば, 下部より上部に次のごとくに区別されている.

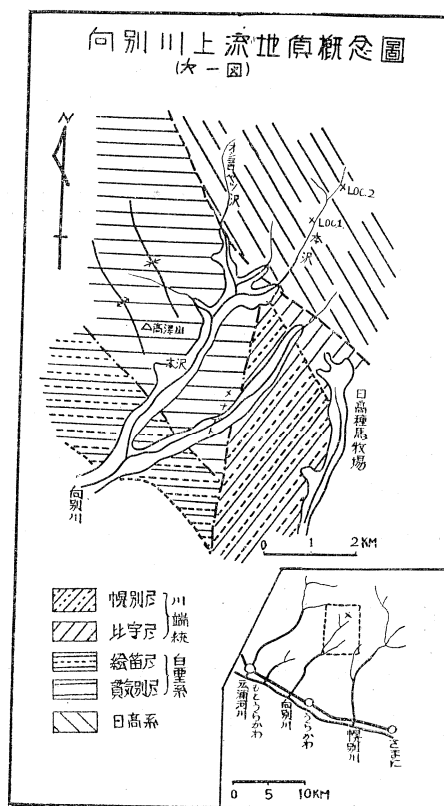
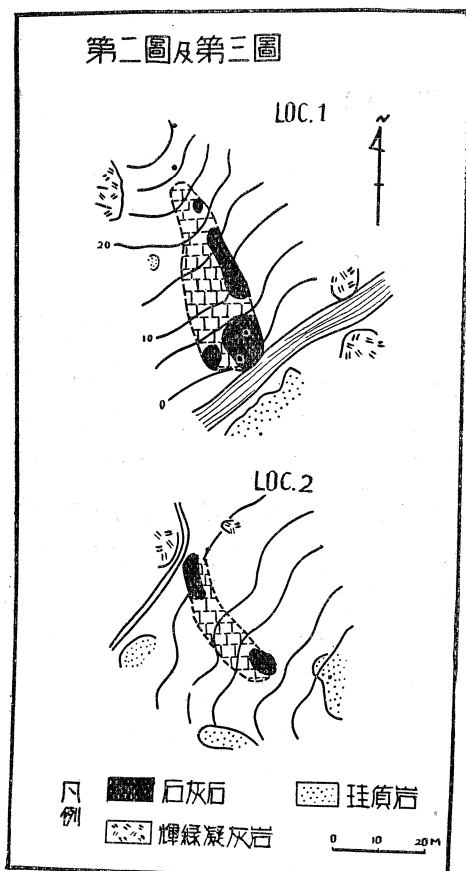
### 1 輝緑凝灰岩層

* 囑託

**竹内嘉助, 三本杉巳代治: 浦河圖幅及び説明書 昭 13

- 2 砂岩, 粘板岩層
- 3 硬砂岩層
- 4 黒色粘板岩層
- 5 円礫質粘板岩砂岩層

この中本沢流域に見られるものは、最下部といわれる輝緑凝灰岩層で、調査の対象とした石灰石をこの中に含んでいる。緑色乃至赤紫色の輝緑凝灰岩を主とし、間に粘板岩およびチャートを介在する。なお部分的には細粒砂岩、チャードがかなりの厚さを示して発達している。化石は全く採集し得なかつた。本層は層理がほとんど不明であるが、測定し得るところでは  $N60^{\circ}\sim 70^{\circ}W, 90^{\circ}\sim 70^{\circ}NE$  の走向、傾斜を示している。白堊紀層と日高系との関係については、



前記浦河図幅によれば、断層をもつて接するとされているが、元浦河上流における湊正雄^{*}の観察によれば、チャート様の岩石をはさんで、ほとんど整合的に累重している点が確かめられている。しかしながら、この地域では両者の接触部が露出なく、かつその附近における各々の走向傾斜について測定し得ないため、その関係については何ら語るべき材料がなく不明である。

とはいえ、前記 1—5 の層序は逆順を示しているものらしく、輝緑凝灰岩層が上位をしめていることは確実であろう。

### Ⅲ 石灰石

前述のごとく石灰石は、日高系の輝緑凝灰岩層

^{*}湊正雄：日高國元浦河及び幌別川上流の石灰岩（北海道石灰岩調査報告 第1報，昭25）

中にレンズ状に介在し、2つの岩体がある。

(第一図 Loc. 1, Loc. 2)

**Loc. 1** (第二図)

オシヨロベツ沢、本沢分岐点より本沢の上流約2.5軒の地点で、右岸に幅約六米の露出を見せる小規模な岩体である。周囲の岩石は輝緑凝灰岩および珪質岩よりなり、石灰石は白色又は青白色、比較的結晶質であるが、一部に輝緑凝灰岩および不純石灰石を含んでいる。左岸には全く見当らない。推定鉍量約4500 吨。

**Loc. 2** (第三図参照)

Loc. 1の地点より上流約2軒の所にあつて、沢の左岸に約5米の幅で露出を示す上と同様の岩質の極めて小規模のものである。周囲の岩石は珪質岩を主とし、他に輝緑凝灰岩および粘板岩よりなる。Loc. 1と同様、化石は全く見られない。推定鉍量約8000 吨。